

放課後の生徒会室で、一般生徒からのアンケートを一人黙々と集計する、女子生徒の姿があった。

三年一組の風紀委員、初月碧唯だ。

多くの生徒は、彼女のことを単に『委員長』と呼んでいた。

彼女はトップクラスの学力を持つ典型的な優等生タイプの少女で、役職にふさわしく融通が利かない堅物であり、同級生達とも少し距離を置いているらしい。

生徒手帳に規定されている通りに制服を着こなし、長い黒髪は頭の後ろで無造作にまとめてある。

長い睫毛の大きな瞳と綺麗に通った鼻すじは十分に美少女と呼べるものだが、彼女は自分の美貌を磨くということにはあまり熱心ではないようだ。

外見の美しさなどで男にちやほやされるようなことは、いかにも軽い女のように嫌だとでも考えているのかもしれない。

(もったいないことだよねえ)

僕は前々からずっと、そう思っていた。

だから今日は、彼女のことを『書き換えて』あげようと、そう決めている。

「失礼します」

そう言って、碧唯が仕事をしている最中の生徒会室に入っていった。

もちろん僕は、生徒会の役員でもなんでもない、ただの一般生徒だ。

「……あら？ あなたは確か、二年生の……」

顔を上げて僕の姿を目にした彼女が、怪訝そうに眉根を寄せる。

僕はそれに構わず、精神を集中させて、『存在の根源の世界』へ入っていった。



「ここが委員長の部屋かあ」

扉を開けて周囲を見回した僕は、ひとつ頷いた。

概ね予想していた通りの、きっちりと整理整頓された優等生的な部屋だ。

女の子らしいものも置いてはあるが、決して華美ではない。

この部屋の雰囲気からして、碧唯はやはり見た目通りの少女で、実は陰で遊び歩いているなどということもなさそうだった。

「さて……」

僕は彼女をどう書き換えたものか、少し考える。

ややあって考えをまとめると、部屋の壁にかけられていた大きめのボードに、新しい彼女の定義を書き加えた。

「初音碧唯は、獅童蓮斗にカウンセラーとして、相談に乗ってもらっている」  
「初音碧唯は、獅童蓮斗のことを完全に信頼しており、そのアドバイスはどんなものでも信じて受け入れる」

「ひとまず、これだけでいいや」

僕は書き換えの成果を試すべく、元の世界に戻っていった。



「二年生の……獅童蓮斗君ね」

元の世界に戻ると、時間は経っておらず、碧唯が先ほどの言葉の続きを言った。しかし、書き換えの成果は明らかに出ている。

彼女の顔は先ほどの怪訝そうなものではなく、少し緩んでいて、こちらを信頼したような微笑みを浮かべていた。

「お疲れさまです。少し休憩して、カウンセリングを受けませんか？ 悩みを相談すれば、ストレスの解消になりますよ」

僕は、にっこりと笑ってそう言った。

カウンセリングのことなんか、本当は何も知らないけどね。

「ありがとう。じゃあ、お願いしようかしら」

僕の言葉を受けて、彼女は椅子から立ち上がり、机の上に重ねられていた書類をまとめて片付けた。

それから、部屋の隅に置いてあったパイプ椅子を広げて、僕にも座るように促してくる。

「それでは、始めましょうか」

僕は碧唯と向かい合って座ると、そう言った。

「はい、よろしくお祈いします」

彼女は礼儀正しく、頭を下げる。

「最近はどうですか？ 仕事や勉強で、疲れてはいませんか？」

「そうですね……。確かに最近、ちょっとだけ疲れ気味かもしれません」

「なにか、困っていることでもありますか？」

「えっと……」

僕の質問に対して、碧唯はやや言い淀む。

「私には、その、あまり親しい友達がいらないんです。なので、相談できる相手が少ないのが悩みというか……」

「それなら、今日は僕に、なんでも相談してくださいね。些細なことでもいいですから」

僕はにっこりと笑って、そう言った。

「はい。そうさせてもらいます」

碧唯は笑顔でそう言うと、少し考え込んだ。

生真面目な彼女は、『相談すること』を探しているらしい。

「……あ、そうだ。実は最近、私のクラスの男子生徒たちの風紀が乱れていて、しょっちゅうタブレットで遊んでいたり……」

碧唯は思いつくままに、いろいろと話していった。

僕は適当に相槌を打ちながら、それに耳を傾けているふりをする。

「なるほど。いろいろな悩みがおありなんですね」

話が概ね出尽くしたあたりで、僕は大きく頷いてそう言った。

「では、ストレス解消をしたほうがいいでしょう」

「ええ。……でも、何をすれば？」

「碧唯さんは座っているだけでいいですよ、僕がしてあげますから」

そう言うと、僕は席を立て、彼女の後ろへ回った。

「？ なにを？」

「マッサージをしてあげます、体を解すと疲れが取れますよ。少しは腕に覚えがあるので、任せてください」

「まあ、それは助かるわ」

僕が肩を揉もうとすると、碧唯は素直に従ってくれた。

「力加減はいかがでしょうか？ 痛くはないですか？」

「ちょうどいい感じです。……でも、どうしてこんなことをしてくれるのかしら？ あなたにメリットがあるとは思わないのだけれど……」

「いえ、そんなことはありませんよ」

僕はそう答えると、彼女の背中に手を当てて、ゆっくりと撫でていく。

「ふふ、なんだか気持ちよくなってきたわ」